

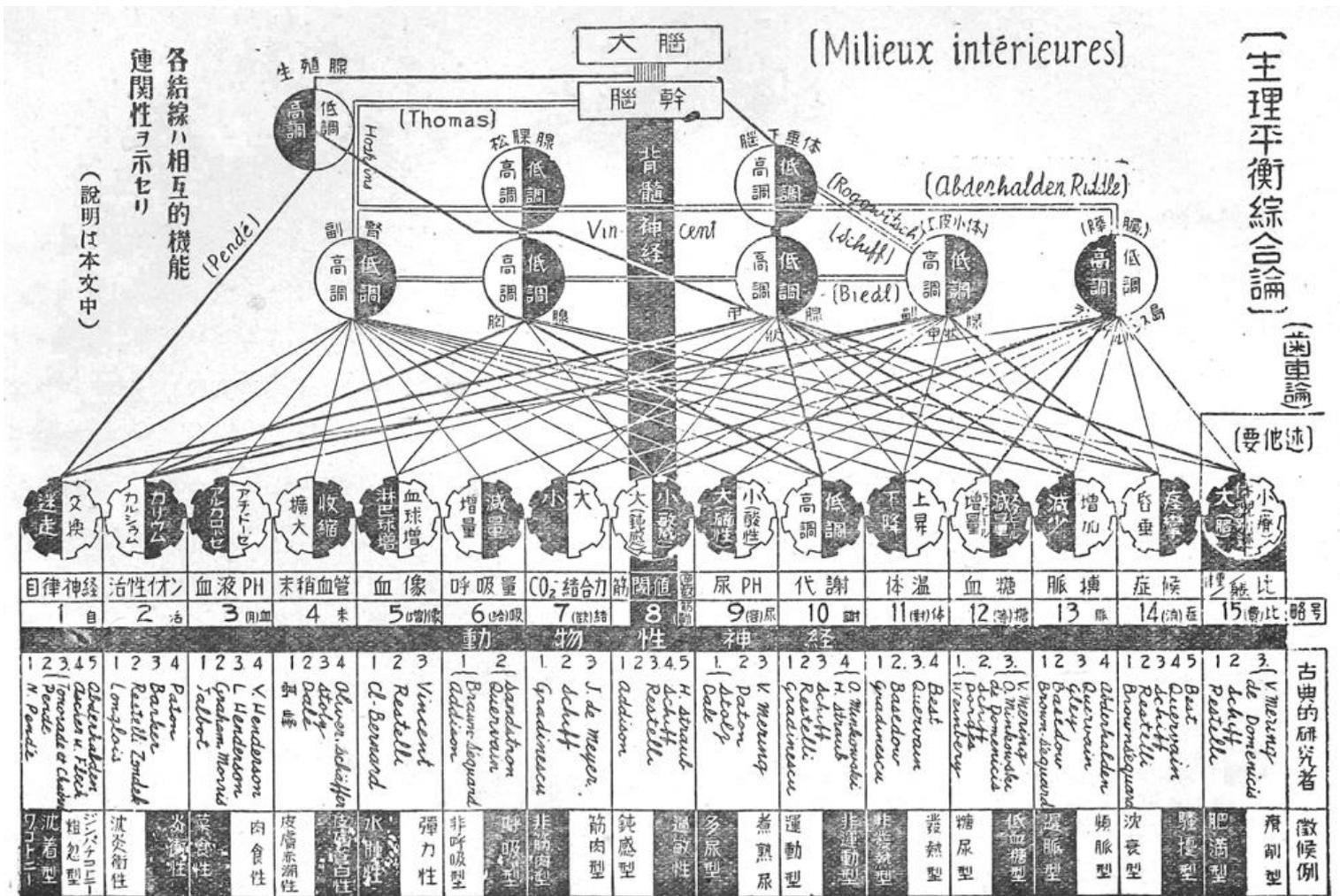
多田政一博士の著書から (92) 詳細版

第七部 全體生理平衡総括論(齒車論) <原文・前半>

理事 田中敏彦氏選

1935年(昭和10年)刊行『綜統醫學提唱論』より

《本文》



さて今余は個々の場合に於ける平衡論を述べて来たが、更に大きな統一全体味の散逸^{※1}を防ぐために、少しは模式化の弊を覚悟して、生理上の並行を圖説上の要約をして本篇を終らう。

次の圖^{☆1}を見られるならば、すべての圓^{☆2}は齒車^{ほぐるま}と考へられたい。而して半圓上に相反的な二面を持っていて、これ等の中正中和線が中央の直經線上にある^{※2}と考へたい。

かうした物の兩面^{りょうめん}を旨く拮抗的中庸^{きつこうてきちゅうよう}^{※3}に導いて、中和性を發揮しているときはこの齒車は圖中の如く、二大別の半圓を對立的に中立平衡^{ちゅうりつ}^{※4}を保っている事を示す。

扱^さて^{☆3}いず^{いず}何れかの外的環境が偏在的に働きかけて、これに直面せる若干の齒車を右へか左へか廻轉せんとすれば、他の全體上の機序は直ちにこの局所的中庸性の失調^{しつじょう}^{※5}を以って全体的中道^{ちゅうだう}^{※6}を害はない様に、代償的平衡^{たいじやうていへい}^{※7}を保つ方向へと廻轉して、常に全體的中和^{ぜんていじちゅう}^{※8}を生みながら歩むところに生命がある。

病的變化とは、かうした異常なる代償過程によって辛うじて全體上の中和を保たんとする平衡であるが、正常なる生命過程とはこの全體が一如的に僅かに右へ左へと週期的に去來して、時間的統一觀^{じゆうかん}^{※9}上に立てば明かに週期變化即中庸性^{ちゅうじゆうせい}^{※10}を示している時を指すものである。

例へば、晝^{ひる}^{☆4}(=昼)の狀態は、この齒車が順次に白い半圓を上にして、微かな^{☆5}優勢を保つ狀態に導かれ、交感神経の舞臺でもあり、(勿論比較的叙述である)アチドージス傾向に向ひ血管は開張して、血球は増し呼吸量を増し、血糖も増し、尿は酸性となり新陳代謝が昇進するであらう。かうした全體的機序^{きじゆ}^{※11}は上部の腦主宰下^{のうしゅさいか}^{※12}の八内分泌輪^{はつぶんせつりん}^{※13}が白圓を擧上して導く所の物でもある。

これに比して、微かな倦怠^{けんたい}を感じる夜が訪れると忽ち、赤い半圓は徐々に夜の哨兵^{しやうへい}^{※14}として交替してワゴトニ一的^{たいおん}^{※15}になり、體温は下降して、アルカロージ斯的^{あるかろーじてき}^{※16}になり、呼吸も血糖も脈搏も代謝も減少して、靜かな寢息に更けて行くであらう。内分泌も亦、白衣を脱いで赤色の停止信號をかかっている。かうした狀態の下に肝腦は復活され蓄へられた、ポテンシャル・エネルギーは再び、難聲の朝^{なんせい}^{※17}と共に勇躍せる筋肉へと注ぎ込まれ旋轉^{せんでん}^{☆6}するヘッド・ワークを無駄なく導くであらう。

かくの如くして上へ下へと他者を休養せしめながら営まれる自然の週周期性の中からうまく過不及なき中道が生み出されていく時、健全なる精神がまたこの肉体へ宿るのである。

故に、もし正眠正起の何れかを失する人は、確かにかうした週周期性中庸^{ちゅうじゆう}^{※18}を失わずと共に若干の齒車に著^{いちじる}しき拮抗を起こしてしまう。この時この際他の圓輪^{えんりん}^{☆7}も亦一方的に齒車連鎖によって廻轉^{くわんてん}^{☆8}されるならば、この過度に立ち到った偏轉^{へんてん}^{☆9}は中央の境界線を示す直經に結びつけられて、ある内分泌への導線を通じて全體的中庸性^{ちゅうじゆうせい}^{※19}の復活の急を要請してより良き、内分泌の調和の下に再び偏せんとする十五輪が正常限界へと引き戻されれば良いのである。

解説

《語句説明 1》

多田博士の言葉は定義の無いものが多いが、文面から言わんとされていることが何となく伝わってくるのではないのでしょうか！

語句の解釈は1つの参考として頂きたいと思います。図をよく見て理解してください。

少しわかりづらいかも知れません。それは後半に続く解説文にも関わってくると思いますので、後半の文章も読まれた上で、再度理解を試みてください。

※1【統一全体味の散逸】異なるものが統一全体観（一体感）を失って個々が分離したりして調和が崩れる事。

※2【中正中和線が中央の直経線上にある】理想的なバランスや調和が、中心に保たれている状態。

※3【拮抗的中庸】特に二つの対立する力や考え方がある場合、その中間を見つけ、両者の良い点を取り入れつつ、バランスを保つこと。

※4【中立平衡】特定の立場や意見に偏らず、公平でバランスの取れた状態を指す。物理的な意味での「平衡」では、力が釣り合っている状態を指し、システムが安定し、どちらの方向にも動かない状況。「中立」という言葉が加わることで、特に対立する複数の立場や要素に対して、特定の側に傾くことなく均衡を保つことが強調される。

※5【局所的中庸性の失調】特定の部分においてバランスが崩れ、適度さが失われた状態を指す。「局所的中庸性」は、全体の中の一部が偏らず適切なバランスを保っている状態を意味するが、それが失調するということは、その特定の部分で過剰や不足が生じバランスが崩れてしまうことを示す。この状態は、システムや組織、身体などが一部の要因によって調和が乱れ、正常に機能しなくなることを意味する。

※6【全体的中道】全体の視点から見て極端に偏らない、バランスの取れた状態や態度を指す。また全体として極端に走らず、調和を保ちながら適度な選択や行動を取ること。

※7【代償的平衡】「代償的平衡（だいしょうてきへいこう）」は、ある要素がバランスを崩した際に、他の要素がその不均衡を補って全体の安定を維持しようとする状態を指す。これは、一部で何らかの変化や不足、過剰が生じたときに、それを補うように他の部分が働きかけることで、全体のバランスを保とうとするメカニズム。この概念は、生物学、経済、組織運営など多くの分野で用いられ、全体の調和と安定を確保するために、互いに補

完し合うことの重要性を示している。

* (一般的な解釈) 体内の酸塩基平衡が崩れた際に、肺や腎臓が互いに補い合ってバランスを保つ仕組みのこと。具体的には、酸性やアルカリ性に傾いた体内環境を正常に戻すために、呼吸や腎機能が調整される。

※8【**全體的中和**】全体的な中和。

※9【**時間的統一観**】時間を一貫して捉える視点や考え方のことを指す。これは、過去、現在、未来の時間の流れを統一的に理解し、どのようにそれらが相互に関連しているかを考えるということ。

※10【**週期變化即中庸性**】周期的に変化する中で、全体として中庸（均衡や安定を保つ）の状態を保つこと。変化があるからこそバランスが取れている状態であり、その変化自体が均衡を保つために必要な要素である。

※11【**全體的機序**】全体としてのシステムや構造がどのように働くか、またその秩序や動作のメカニズムを指す。

※12【**脳主宰下**】脳が主宰となっている。(主宰：全体をとりまとめること)

※13【**八内分泌輪**】図の中の8つの円

内分泌腺は、ホルモンを分泌して体内のさまざまな機能を調節する重要な器官。

8つの内分泌腺とは、下垂体、甲状腺、副甲状腺（上皮小体）、膵臓、胸腺、副腎、性腺、松果体のことを言う。

〈補足説明〉

- 下垂体：脳の下に位置し、成長ホルモンや抗利尿ホルモンなどを分泌する。
- 甲状腺：喉の前にあり、代謝を調節するチロキシンなどを分泌する。
- 副甲状腺（上皮小体）：甲状腺の裏側にあり、カルシウムの濃度を調節するパラソルモンを分泌する。
- 膵臓：インスリンを分泌し、血糖値を調節する。
- 胸腺：免疫系に関与し、思春期以降は退化する。
- 副腎：腎臓の上にある、ストレス反応に関与するアドレナリンなどを分泌する。
- 性腺：男性では精巣、女性では卵巣があり、性ホルモンを分泌する。
- 松果体：脳の中央に位置し、睡眠を調節するメラトニンを分泌する。

これらの内分泌腺は、体内のホルモンバランスを保ち、健康を維持するために重要な役割を果たしている。

※14【哨兵^{しやうべい}】見張りの兵士のこと。

※15【ワゴトニー的】迷走神経反射 と呼ばれる生理学的反応によって引き起こされる状態を言う。

※16【アルカロージ斯的】血液 pH は 7.35~7.45、血液がこの基準値よりも下回る状態をアシドーシス、上回る状態をアルカローシスと言う。

※17【難聲の朝】『なんせいのあさ』は、困難や苦難に満ちた朝の情景や心境を表す。具体的には個人が困難に直面し、その結果として迎える重苦しい、または辛い朝の様子を描写することを意味する。この表現は、逆境や苦しみを超えて新しい始まりを迎えることを表す。

（「なんせいのあさ」は、唐代の詩人白居易^{はくきよい}が作った「長恨歌^{ちやうごんか}」の一節。この詩は、唐の玄宗皇帝^{げんそうこうてい}と楊貴妃^{ようきひ}の悲恋を描いたもので、彼らの愛と別れ、そして再会を詩的に表現している。具体的には、玄宗皇帝が楊貴妃を失った後の悲しみと孤独は大変なもので、彼が朝廷の政務を放棄してまで楊貴妃との思い出に浸ることになる。）

※18【週期中庸】周期性：ある特定の現象が一定の時間ごとに現れること。

中庸：極端に偏らず、バランスの取れた状態を指す。

※19【全體的な中庸性】さまざまな視点や要素を統合し、極端に偏ることなくバランスを保つことを意味する。この考え方では、物事において一方に偏りすぎることを避け、全体的なバランスを維持することである。

《語句説明 2》

☆1 圖^ず：図

☆2 圓^{えん}：円（白圓：図の中の丸い円）

☆3 扱^{きて}：さて

☆4 晝^{ひる}：昼

☆5 微かな^{かす}：かす（かな）

☆6 旋轉^{せんてん}：回転

☆7 廻轉^{かいてん}：回転

☆8 偏轉^{へんてん}：変転

☆9 圓輪^{えんりん}：円輪

《所感》

生活医学ジャーナルにもかきましたが、今回の歯車論（総括論）は、難解な部分が多く、基本的に図の説明ですのでわかりにくい部分も多いと思います。全文を数回に分けて分かる限り解説したいと思います。

しかし多田博士の言わんとしておられる事は一貫しています。そのことを汲み取っていただければ、個々の医学的理論を超えて、全体的な医哲学として人間というものを咀嚼していただけることを願っています。

科学的な医学的研究は日々進歩しています。昔の研究が基盤となって新たな研究が進んでいくこともあれば、昔の研究が覆くつがえされることもあります。今後我々は、自分の体の力（ホメオスタシス、自然治癒力）を信頼するということが重要になってくると思います。

医学的な基礎研究に振り回され過ぎる事の無いようにしたいものです。研究が進むことは喜ばしい事なのですが、現実には全体観を欠いた研究が進み、ますます細分化していくことでしょう。その結果を、更に全体観を失った（局所観のみの）臨床医や治療家が引用し、局所的な治療のみを優先して施ほどこしていることが現状となっているのではないのでしょうか！そんな局所的医術がますます広まっていることに警告を発し、局所から全体的医術へ進化発展させることが生活医学の願いです。

人間は部品の寄せ集めではありません。それぞれの組織が補い合い、助け合って人間という個体を作り上げているのです。人間同士でも同じです。お互いが助け合って生きているのです。各組織が総合調和で働いているように、人間同士も総合調和して生きているのです。この社会で1人で生きている人は1人もいません。お互いにお互いを助け合って幸せに生きているのです。共存共栄するはずの人類が戦争をしている場合ではありません。各組織がお互いの主張によって戦争すれば、待っているのは病気、そして死です。分かり切った話です。

人間は、なぜそんなわかりきった事をするのでしょうか？ 自滅行為（自業自得）である争うという行為を…。それは言葉でいうと、**全体観を失い、局所観に走った結果**ではないでしょうか？

生活医学は局所観的医学を全体観的医学へと導くべく邁進まいしんしていきます。また個人が健康維持を維持するためには、多田博士が叫ばれている『習慣革命の実践』以外にはあり得ません。このことを胸に刻んで生活医学の普及に努めましょう。